

# 第一章 宣教師デヴィソンとロンゲ

メソジスト教会の日本宣教

デヴィソン

ロンゲ

生い立ち、召命、結婚

送別会とニドルの銀貨

加伯利英和学校

始業式、最初の生徒たち

宣教旅行 百貫港、熊本、川内

鹿兒島、やまと丸船上で、長崎到着

福岡宣教

宣教報告

その後のロンゲ

注

参考図書

## メソジスト教会の日本宣教

メソジスト教会\*1の日本宣教の開始は、一八七三（明治6）年のことであった。その前年一八七二（明治5）年、ニューヨークで開催されたメソジスト教会の総会は日本宣教を可決し、日本宣教部を開設し、当時、中国で宣教活動をしてきたR・S・マクレイを責任者に任命し、宣教資金に二万五千ドルを計上した。

日本宣教部第一回会議は、東京地区にジュリアス・ソーパーとI・H・コレルを、函館にL・W・ハリス、長崎にJ・C・デヴィソンを任命した。\*2

このときマクレイは「日本人は完全に西欧文明を受容することを決断した」。ゆえに「近代教育こそ日本宣教の鍵である」という明確な認識をもって、中国におけるミッションとはまったくことなるアプローチを試みた。

この年の八月、監督W・I・ハリスは米国から中国に行く途中、横浜に立ち寄って、正式に日本年会を組織し、日本全国を横浜・東京・函館・長崎の四教区に分け、長崎教区の責任者をデヴィソンとした。デヴィソンは、長崎から沖繩をふくむ九州全域に福音の宣教をした。その感化を受けて、学生たちが加伯利英和<sup>カブリ</sup>学校に集まり、ここから有力な牧師や卒業生が送り出されたのである。



J. C. デヴィソン

## デヴィソン

デヴィソン (John Carroll Davison 1843-1928) は、ニュージャーシ州で生まれた。南北戦争で北軍に従軍し、戦後ドルー神学校に入った。そこで、ジュリアス・ソーパーと出会い、共にメソジスト教会が派遣する宣教師として日本に赴く決心を与えられた。彼は一八七三年メアリー・スパーの妻となり、彼らは一緒に結婚式を行い、新婚の二組の夫妻は初来日の旅に出たのである。

デヴィソンは、長崎に居を移し、出島メソジスト教会を建設した。また、教育ができる男女の宣教師を、アメリカの教会に要請した。デヴィソンの求めに応じ来日した女性宣教師ラッセルとギールは活水女学校を設立し、その一年後にロングが男子教育のために来崎し、加伯利英和学校を設立した。

## ロング

生い立ち



C. S. ロング

ロング (Carroll Summerfield Long 1850-1890) は、  
W・H・ロング牧師と、サラ・エリザベス・ロング  
夫人の間に生まれた二人の子どもの長男であっ  
た。

彼は一八七五年、東テネシー・ウエスレヤン大学  
を卒業し、ノースカロライナ州アッシュビルにある教会の牧師となり、同時に  
キャンドラー・カレッジの学長を兼任することになった。

### 召命

しかし、ロングは以前から外国宣教の事業に召命を受けていると感じていた。  
メソジスト教会の外国宣教局が、アフリカに派遣する宣教師を求めていることを  
知ると、その求めに応募したのであった。ところが、翌、一八八〇年の任命が発  
表された時、その任地は彼が志願していたアフリカではなく、思いもかけず、日  
本へ派遣されることになっていたのであった。その翌年「五ヶ月に及ぶ第一学  
期が終わった時、私は日本への宣教師として赴任するようにとの任命を受けるた  
めに現在の職を辞任した。この新しい任地日本へ私たちが出発する時は一八八〇  
年三月一日と定められた。」



結婚記念写真 1879年

### 結婚

彼は日本への任命を受けた前年の一八七九年、ニューヨーク州カントンのW・C・スミス牧師と、M・S・スミス夫人の令嬢フローラ・アイ・スミスと結婚した。フローラはシラキユース大学芸術学部で音楽を学び教師資格を取得していた。

### 送別会と二ドルの銀貨

一八八〇年二月一三日、ロングの母校である東テネシー・ウエスレヤン大学の学生たちが送別会を催してくれた。「大学の礼拝堂は父や母、妹や弟、親戚や友人たちでいっぱいであった。彼らは『さようなら』を言おうとしていた。それは私にとってつらいひと時でもあった。」

この送別祈禱会の後、故カブリー学長の夫人が二ドルの銀貨をロング夫妻にゆだね、「日本の若い人々に教育する資金に加えてください」と言った。それに続いて五百ドルの学校設立の資金が添えられたのである。彼らは、一八八〇年一月二八日、サンフランシスコから、ガエリック号で船出し、同年四月四日、長

崎に到着した。

### 加伯利英和学校

ロング夫妻は、その後、約一年半にわたる準備をし、新しい校舎を建築することができた。「校舎の建物は完了しました。これは私が日本に到着して以来、個人的に寄付してもらった資金によってできたものです。五〇×四六フィート（約一五×一四メートル）の二階建です。これには一つの大教室が階下であり、二つの自習室と九つの部屋が階上にあります。九つの部屋というのは遠方から来て下宿をしたいという学生の宿泊のためのものです。それは西欧式の建築で、外側を



最初の校舎 2階は寮

ペンキで塗り、内側をしつこいで固めてあります。アメリカ風の設計により、外観は瀟洒しやうしやがちりとしています。これには千二百ドルほどを要しましたが、その約半分の五百ドルはカブリー・セミナーのため個人的になされた寄付金によってすでに支払いをすませました。<sup>\*3</sup>

一八八一（明治14）年一〇月二三日に落成式を挙

した。この日が、「鎮西学院」の創立記念日と定められている。ロング夫妻は、その創設した学校を「加伯利英和学校」と命名した。この名前についてロングは次のように言っている。「この建物はアメリカにある貧しい一未亡人によって献げられた二ドルの献金がもとになり、それが次第に増大した資金でできたものです。わたしはこの方に敬意をはらうため、その名をとって学校の名をカブリー・セミナリーと呼ぶことにしました。」\*4

## 始業式

今朝、九月一三日、食後、私はセミナリーに登って行って新学期の始業式をしました。聖書はルカによる福音書八章一〜五六節でした。学生は新約聖書を講読することを要求されていて、毎朝その拝読会に加わるようになっていきます。そのレッスンを一同が入念に読み終わったところで、私が質問し、時間の許す範囲で説明を加えることにしています。通常このような演習に四五分を要します。祈祷の後に英語のクラスが来ることになっています。私はそのコピーを一同の机の上においたあと、必要な指導を与えます。この学科に一時間半を用います。それで朝の英語演習は終わりに



ロングと最初の生徒たち

なるのです。私は午前九時三〇分に教室を出て自分の書齋に入り、正午まで自分自身の研究をすることになっています。

### 最初の生徒たち

写真は創立して五ヶ月目の一八八二年三月に撮影したものである。森泰次郎、峰彦郎、酒井伊之助、遠山参良きんざうなど一二名が入学した。後列右から五番目には、トーマス・グラバーの子、倉場富三郎\*6がいる。

「私の肩に手を置いている者は二週間前に洗礼を受けたばかりの熱心で小さなクリスチャンです。この学生は六ヶ月ばかり前に私のところに来て、キリスト教を研究したいと申し出て、かつ、自分の勉強に要する学資を得るために、学校の掃除人になりたいと言ひ、以来この資格で奉仕を続けています。」

学生の中には英語を学ぶのが唯一の目的であった



者もいく人かあったが、大部分は進んでキリスト教を研究し崇高な教すうこうえを学ぶようになった。開校二年後、学生は二五名になった。

加伯利英和学校は、その第二年目をキッチン牧師 (w. c. kitchin) の管理の下に開始しました。この人は今月一日、すばらしい夫人と 共に着任され、熱意と覚悟をもって活動を始められました。そのうえ、彼は過去において数年間音楽の指導に輝かしい成功をおさめた経験をもっておられるので、その経験を生かすため音楽部の責任者となってもらいました。

### 宣教旅行

ロングは長崎教区の責任者として一八八四年三月から四月にかけて九州西南地方を、長崎から海路、熊本へ、熊本からまた海路、日奈久、米ノ津、阿久根、川内、鹿児島へ二三日間の宣教の旅をした。

### 百貫港へ

三月二六日 長崎から、野母崎を経て、島原港に入る。筆舌に尽くしがた

い美しさ。麦畑が狭い溪谷をよぎって広がっている。段々畑の頂まで野菜畑、常緑の小さな森と崖。森におおわれた山々、岩の突き出た山岳……。風の吹くままに四方八方に出て行く数百の漁船の白帆……。

三月二七日 百貫港に着いた。これから二四キロの山坂道を人力車に乗って、午後三時に菊池に到着した。……ものすごく沢山の会衆が集まった。私は彼らを一〇時過ぎるまでひきつけておくことに成功した。飛鳥さんが説教する場所を得たのは、昨年加伯利学校の学生であったときに回心した一青年の力によるものであった。彼が入学したときは、まことに乱暴な異教徒であった。が、間もなく朝の聖書研究だけでなく、キリスト教そのものに関心をもつようになり、熱心な真理探究者となつていったのである。この一事でも私たちの学校の影響が遠隔の地まで及びつつあることがわかるのである。この青年はさらに何年か学校にとどまる計画であったのだが、健康を害したために勉学をあきらめなければならなかった。彼は帰郷後、この地の学校の教師として採用されたので、これを好機として、自分で理解できる限りのキリスト教の真理を人々に伝える努力をなしはじめたのである。

熊本

今朝早く、人力車を雇って、菊池を出発し、熊本に着いた。・・・二日以來、噴火口から巨大な煙の柱が噴き出している。この伝道地ではじめての四季会 (Quarterly Conference) が開催された。私が議長席につき、飛鳥さんが書記となった。ほかに四名が出席した。今はこれらのことは「まことに小さく」見えるけれども、それはやがては大きな教会、または強力な活動の基礎となるであろう。牧師は明日一四名が受洗することになると報告した。それらの人々を私は今日の午後訪問した。

川内

阿久根から川内までの道のりは、馬に乗って一日の旅、およそ四〇キロである。道は海岸に沿って走っている。その山側もすばらしい眺めである。・・・私たちは、道中、六人の盲人を導いていく一人の少女に出会った。私はこの光明と美とのただ中におりながら、暗闇のなかをよるめくように歩いているこれらの盲人たちの姿を見た時、この喜びにあふれる美しい国の中の幾百万人かが、栄光輝く光と美の中に住みながら、その幸福を知らずに、暗闇の中で人生の道を手探りしつつ歩いていると思ひ、私は静

かに祈った。「これら幾百万人の血の一しずくといえども私の衣のすそを染めることがないように」と。

川内の教会は一八ヶ月前に創立されたのであるが、その時はわずか八名の会員をもつて開始されたのであった。ところが今日の四季会の報告によれば、今や四〇名以上の会員を有するにいたっている。・・・しばらくの間、睡眠をとる必要がある。私は蚤<sup>のみ</sup>たち<sup>の</sup>にわいろでもやって、今夜は、私をただ一人にしてくれるよう、願っている。

## 鹿児島

四月九日

鹿児島に着いて、「はなはだ嘆かわしい状態」ふたを開けたら中の害悪が飛び散るといふギリシア神話をひいて「パンドラの箱」ともロングは言っている。これまでロングの手足となつて働き、説教なども担当していた飛鳥健次郎が、教会の金を自分の利益のために使つていたことが判かり、「彼は正直に過ちを告白し、罪を悔い改めた。不正に取つていた金銭を返済し、世俗的な一切のことを放棄して、自分自身を牧師としての仕事に完全にささげると約束した。」

ロングは鹿児島に学校を建設する準備をし、そのための教師候補をさがしていた。しかし、こころした混乱はその実現を難しくした。

#### やまと丸船上で

家路に着く。実は昨日出帆したのだが、風が吹き出して、船長が航海の続行をおそれるほどの強風となったので、二〇時間も待った上で再び出航した。今は荷物を積み込むために停船中である。都合よく行けば明日午後三時ごろ長崎に着くことになるであろう。

#### 長崎到着

四月一六日 昨夜、真夜中に家に帰り着いた。愛するものたちはみな元氣である。再びわが家に帰り着くことができうれしい。

今までのことを要約しよう。二三日間旅行したことになる。この間に二五回説教し、二つの教会を設立し、八名の子どもを含む四五名に洗礼をほどこし、六四〇キロを旅行し、その間、日本人の家に泊まった。

ロングはさらに同年一〇月福岡宣教を志し、ここにも教会と学校の建設を試み

ている。

### 福岡宣教 一〇月三〇日

この日の未明に海路博多に上陸した。ロングは、先に加伯利学校をわけ訳あつて退学して、帰っていた福田と陣野という二人の学生を訪ねた。二人の協力によつて、教会と学校の二つの土地を購入することができた。\*7

### 宣教報告 (メソジスト教会外国宣教局に送られた)

私たちの教会員は三〇パーセント以上増加し、会衆も同様に増加しました。洗礼希望者の数も過去数年よりは多く、日曜学校の出席数もこの年間に於いて二倍以上になりました。

最近、私が薩摩と肥後の両地方に訪問した時には一般の人々が喜んで神のことばを聞いているのをみました。・・・私たちは島原、久留米、宇土、熊本において早急に活動を開始すべきだと思ひます。けれどもそれらの地に派遣すべき人材をもっていないのです。・・・今、最初の一年を終つたカブリー・セミナーには全部で四五名の学生がいます。彼らは、

英語、日本語、漢文の正課を学んでいますが、いずれも喜ぶべき成績を上げつつあります。また、彼らは皆毎日一時間を聖書の研究にささげています。私たちは四名の学生がこの年の間にキリスト教信じて牧会（牧師の働き）に入る準備をするにいたったことを感謝しています。

### その後のロング

一八八五年春、ロング夫妻は最初の休暇で五年ぶりにアメリカに帰った。この期間に、彼は、古代ギリシャ哲学の研究を完成し、その試験に合格して、一八八六年哲学博士の学位を受けた。一八八七年、彼らは再び日本に帰って来たが、前住地の長崎でなく、名古屋教区に任命を受けたのであった。名古屋で四番目の娘ジェラルデイン・ミチが生まれた。また現在の名古屋中央教会を設立した。また、清流女学校を創設した。けれども、残念なことにロング夫人の健康がそこなわれ、医者から、日本にとどまっただけでは危険であると言われるほどに悪化した。そこで彼は滞日三年足らずで、一八九〇年、帰国することになった。彼は三たび日本に帰る計画を立てていた。テネシー州に到着後、彼は休む間もなく伝道に従事していた。しかし、彼はノースカロライナ州アッセルビル近くの教会で病氣

になり、不幸にもわずか一〇日の後、その教会で亡くなったのである。それは一八九〇年九月四日のことである。四〇歳の生涯であった。

## 注

- \* 1 「メソジスト教会」、当時「アメリカメソジスト監督教会」は、南北戦争で北軍と南軍側に分かれ、デヴィソンは北軍に従軍し、ロングも北部メソジスト教会であった。メソジスト系の教会は協議を重ね、一九三九年「合同メソジスト教会」となった。(関西学院辞典、[http://www.kwansei.ac.jp/r\\_history/r\\_history\\_008728.html](http://www.kwansei.ac.jp/r_history/r_history_008728.html))
  - \* 2 C・S・ロング日本宣教記 一三、一四頁
  - \* 3 同右 六六頁
  - \* 4 同右 四四頁
  - \* 5 遠山参良は本書 第四章
  - \* 6 倉場富三郎は本書 第三章
  - \* 7 同右 六二頁および福岡中部教会百年史、福岡中部教会第二章
- \* 追記 一〇頁と一二頁にでてくる飛鳥健次郎は、ロングが長崎で宣教活動を開始して三年後に、最初の改宗者となった。彼は仏教の僧侶であったがキリスト教



の真理を知り、「十字架の福音の熱心な牧師」となった。ロングの助手となり通訳をなし、熊本での定住時代は住民の激しい迫害を受けた。鹿児島では学校建設の準備に取りかかっていた。また、ロングが去ったあと、現福岡中部教会の第二代牧師をした。

参考図書

- C・S・ロング 日本宣教記、鮫島盛隆、キリスト新聞社、一九七四  
鎮西学院九十年史、鎮西学院、昭和堂印刷、一九七三  
日本基督教団福岡中部教会百年史、福岡中部教会、福岡印刷、昭和六〇  
日本基督教団熊本白川教会百周年記念史、新教出版社、一九八五  
キリスト教人名事典、日本基督教団出版局、一九八六  
日本キリスト教歴史大事典、教文館、一九八八  
来日メソジスト宣教師事典 1973-1993、クラシメル、教文館、一九九六